

道元と如浄(十)

—『如浄禪師語録』到来を中心に—

伊 東 洋 一

さて『遍參』の巻に続いて、十二月十七日には同じ禪師峯で『眼睛』と『家常』の二巻の示衆のあったことが奥書で知られる。⁽¹⁾そして両巻共、「眼睛」と「家常」ということを中心に、全巻殆ど『如浄禪師語録』よりの引用による拈弄である。ここでは先ず『眼睛』の巻から検討しよう。

十 正法眼蔵眼睛

この巻は洞山と雲巖の問答一つ以外、『如浄禪師語録』から引用された七つの如浄の言葉を中心に成り立っている。その主題はいうまでもなく「眼睛」であるが、冒頭にはその眼睛の一般的説明と思われるものが述べられている。すなわち

億千萬劫の參學を拈來して、團圓せしむるは、八萬四千の眼睛なり。⁽²⁾

この言葉は難解である。註解書を参照して煩惱即仏法の眼目（眼睛）と解して、億千万年の長い間の修行を円満に成就させるのは、八万四千の煩惱をそのまま仏法の眼目とすることである、と意味をとってみたい。もしこの煩惱即仏法の眼目が眼睛の概括的定義、説明とすれば、以下の如浄の言葉についての道元の解説はその具体的説明と見られるから、そこにわれわれの問題を追求してみることになる。

最初にとりあげられる如浄の言葉とその解説は次の通りである。

先師天童古佛、住ニ瑞巖ニ時、上堂示レ衆ニ云、秋風清、秋月明、大地山河露ヲ、ナリ眼睛、瑞巖點睛ニ重ニ相見ス、ヲ棒喝交馳ニ驗ニ納僧ニ。

いま納僧を驗すといふは、古佛なりやと驗するなり。その要機は、棒喝の交馳せしむるなり。これを點睛とす。恁麼の見成活計は眼睛なり。山河大地、これ眼睛露の朕兆不打なり。秋風清なり、一老なり。秋月明なり、一不老なり。秋風清なる、四大海も比すべきにあらず。秋月明なる、千日月よりもあきらかなり。清明は眼睛なる山河大地なり。納僧は佛祖なり。大悟をえらばず、不悟をえらばず、朕兆前悟をえらばず、眼睛なるは佛祖なり。驗は眼睛露なり、瞎現成なり、活眼睛なり。相見は相逢なり。相逢相見は眼頭尖なり、眼睛霹靂なり。おほよそ渾身はおほきに、渾眼はちひさかるべしとおもふことなかれ。往往に老老大大なりとおもふも、渾身大なり、渾眼小なりと解會せり。これ未具眼睛のゆゑなり。⁽⁴⁾

先ず如浄の言葉の意味を辿ってみる。それは瑞巖寺における示衆として、秋風は爽涼で、秋月は清明である。この秋風の清爽と秋月の清明によって、山河大地は仏の本来の姿（眼睛）を現わしている。私（瑞巖）は仏眼を開いて「あ

らためて見て」(重相見)、修行僧がこの様子を真に見ているかどうか、棒喝を次々と下して試してみる、と述べていると解される。

前半は山河大地即仏の本来の姿(眼睛)ということ、煩惱即仏法の眼目(眼睛)を受けている。しかし道元がこの如浄の言葉に注目するのは後半ではあるまいか。山河大地即眼睛は昔からそうで、今ここでそうなったとかいった問題でない(山河大地、これ眼睛露の朕兆不打なり)。問題は如浄が仏眼を以てあらためてこの様子を見て、修行僧もそう見ているかどうか試してみる、という後半ではないであろうか。修行僧とは道元である。その道元が古仏であるかどうか験されている。すなわち山河大地が眼睛露の朕兆不打なることを見ているかどうか、つまり仏眼で見ているかどうかである。ところで修行僧とは仏祖のことである。それは悟不悟を超越した存在である。眼睛なのである。だから験するとは眼睛の活動、仏眼の現成である。ところで「瑞巖點睛重相見」であるが、先に「私(瑞巖)は仏眼を開いて、あらためて見て」と訳してみたが、道元はこれを「相見は相逢なり、相逢相見は眼頭尖なり、眼睛露露なり」と説明する。仏眼であらためて見るとは「相逢」であるという。それは如浄と道元の相逢でなくてはならず、そこで相い逢い相い見る様子は眼と眼で見合うことであり、それは雷鳴と稲光りとの出合うに似ている。われわれの問題からすれば、このように道元が如浄の言葉を解するのには、如浄の棒喝に必死に応えんとしている様子を思い描かせるのである。

次は洞山と雲巖の問答で、「乞_二眼睛_一底、是眼睛否」つまり眼睛即眼睛がその趣旨と思われるが、とに角ここのだけ『如浄禅師語録』からの引用でないので、全文の検討を省くが、中に一箇所「身心」の文字が見えるので、その点のみを問題にしてみよう。それは「雲巖曰、『乞_二眼睛_一底、是眼睛否。』師曰、『非眼睛。』」⁽⁵⁾に關して、「これ眼睛の自擧唱なり。非眼睛の身心慮知、形段あらんとをば、自擧の活眼睛なりと相見すべきなり」とする箇所である。それ

は、お前が乞い求める眼睛はお前自身のことではないかといったのに対して、洞山（師）は「私は眼睛ではありませんと答えた。それを受けて道元は、「これは眼睛自身が眼睛でないといっているのである。眼睛でない身心や慮知心などいろいろあろうが、それらは眼睛自身の活きた眼睛と見て相見すべきである」と意味をとれる。それは註解書によっても、「是眼睛なるがゆゑに非眼睛なり、ゆゑに眼睛の自舉唱なりといへり」身心慮知形段は眼睛なるをもて自舉の活眼睛なりと相見すべしといふ、影室いはく、非眼睛の身心とは、眼睛の上の身心慮知形段なるべし、と」(私記)⁽⁷⁾、又「この非眼睛の非の詞、又是非の非にあらず、眼睛の上の非也、ゆへに眼睛の自舉唱也といはるゝ也、非眼睛の身心とは、眼睛の上の身心、慮知形段なるべし、この道理のあらむ處は、まことに自舉の活眼睛也と相見すべき理必然なるべし」(御抄)⁽⁸⁾とされ、身心も眼睛という価値、絶対的なものに貫通されている、更に絶対そのものということではないかと考えられることによる。果してこの見方が「身心一如」のわれわれの問題と直接結びつくのかどうか。次は再び如淨の言葉とその評釈である。

先師古佛いはく、扶_二出達磨眼睛、作_二泥彈子_一打人。高聲云、著。海枯徹底過、波浪拍_二天高。

これは清涼寺の方丈にして、海衆に爲示するなり。しかあれば、打人といふは、作人といはんがごとし。打のゆゑに、人人は箇箇の面目あり。たとへば、達磨の眼睛にて人人をつくれりといふなり、つくれるなり。その打人の道理かくのごとし。眼睛にて打生せる人人なるがゆゑに、いま雲堂打人の拳頭、法堂打人の拄杖、方丈打人の竹篋拂子、すなはち達磨眼睛なり。達磨眼睛を扶出しきたりて、泥彈子につくりて打人するは、いまの人、これを參請請益・朝上朝參・打坐功夫とらいふなり。打著什麼人。いはく、海枯徹底、浪高拍天なり。⁽⁹⁾

『住建康府清涼寺語録』に見える全文は、「指山門截斷程途驀直來。乾坤洞徹此門開。左邊拍兮右邊吹。倒翻關板起風雷」指佛殿開殿見佛。眼中毒刺咄拔却刺。禮拜燒香顛倒鈍置」「踞方丈抉出達磨眼睛。作泥彈子打人。高聲云。看海枯徹底。波浪拍天高」¹⁰⁰で、それは清涼寺入山に當つて、如淨の住寺としての決意を詠んでいるように見える。すなわち、山内に至ると出迎への僧が左右に待つており、仏殿を開いて仏に焼香礼拝し、方丈に坐してこれから衆僧に如何に対すべきかと。

さてこの如淨の偈の意味を道元は、教育（打人といふは、作人といはんがごとし）のあり方としてとらえているようである。そしてその教育とは、教育が成り立つ為には個々人の可能性（達磨の眼睛）の認識に立つて、それを引き出すことにある（打のゆゑに、人々は箇々の面目あり。たとへば、達磨の眼睛にて人人をつくれりといふなり、つくれるなり。その打人の道理かくのごとし）。これが如淨の教育観であると道元は見る。しかも打人（教育）という以上、打つ人と打たれる者、打つ仕方と分けられるが、そうではない。打つ人も打たれる者も、打つ仕方もすべて眼睛に貫かれている。しかも打人（教育）即眼睛などはまだ生温い。それは徹底的で（海枯徹底、浪高拍天）、被教育者（打著什麼人）は眼睛そのものである。道元はここで何を云おうとするのか、何が云いたいのであろうか。次に移る。

先師古佛上堂、讚歎如來成道云、六年落草野狐精、跳出渾身是葛藤、打失眼睛無處覓、証人剛道悟明星。¹⁰¹
その明星にさるといふは、打失眼睛の正當恁麼時の傍觀人話なり。これ渾身の葛藤なり、ゆゑに容易跳出なり。覓處覓は現成をも無處覓す、未現成にも無處覓なり。¹⁰²

この上堂語の『住建康府清涼寺語録』に見える金文は、先ず「臘八上堂。」とあって右の言葉が続き、その後「清涼麼麼讚歎作知恩報恩其或不然、年年臘八一甌茶。禮拜燒香鈍置他」⁽⁴⁾と成っている。その意味をとってみる。釈尊成道の十二月八日、上堂して次のように述べた。釈尊は六年間野狐の身に堕ちて苦行した。その苦行をやめたけれども、満身つたかずら（煩惱）に覆われていて、見る眼を失っているから真理を覓めようにも術がない。それを徒に曉闇の菩提樹下に坐っていて、明星に真理を悟ったといつて人を誑かす。わたし（清涼）はこのように釈尊を讚歎し、このことを釈尊の知恩、報恩などとんでもないというなら、毎年迎えるこの時節に一瓶の茶を献じ、焼香礼拝して釈尊を馬鹿にしてやろう。ところがこれに対する道元は、「道悟明星」を評して、それは凡眼を失って心眼を得た当の人（傍観人）の言葉である。しかしその人は満身つたかずらに縛られているのである。だから脱出も容易なのである。真理は尽十方界に遍満しているのであるから、真理の現成未現成に関わりなく覓めるところもない、と。それは煩惱即菩提あるいは迷悟不二、一如を云ったものであろうか。もしそうだとしても、それでは如浄の偈と道元のその評釈はどう結びつくのであろうか。

次に移る。

先師古佛、上堂云、瞿曇打ニ失眼睛時、雪裏梅華只一枝、而今到處成荆棘、卻笑春風繚亂吹。

且道すらくは、瞿曇眼睛は、ただ一二三のみにあらず。いま打失するは、いづれの眼睛なりとかせん。打失眼睛と稱する眼睛のあるならん。さらにかくのごとくなるなかに、雪裏梅華只一枝なる眼睛あり。はるにさきだちて、はるのころを漏泄するなり。⁽⁵⁾

如淨の偈は『梅華』の巻にも引用され、その箇所の意味を考え、検討したのであるが、云うまでもなく「梅花」を中心としてであった。先ず如淨の偈であるが、『住建康府清涼寺語録』に見える全文は、「臘八上堂」に始つて右の文が続き、その後「諸方說禪清涼念詩還當得麼。其如不然。燒香點燭拜泥團。腦後遼天鷄子飛」の言葉となる。通解してみると、十二月八日釈尊成道の日の上堂、釈尊が凡眼を失つて心眼を得て、その目で見渡すと、皚々たる白雪の中に梅花一枝だけが花開いて、しかも尽界春色に満ちていた。ところが今は到る処その梅花がとげ、いばらをひろげて、春風に繚乱と花咲き乱れている。諸方の禪林ではこの日に禪を説くが、私（清涼）は右の詩を読むのである。どうだ当っているであろう。もし当っていないというなら、焼香点燭して仏像を拜もう。そうなれば頭上遙るか大空に向つて行先知れず飛び去るはやぶさのように、真理は逃げ去つておる、と云つたことにならうか。一方道元はこれを評して、釈尊の眼睛は、一二三と数えられるものではあるまい、無数にある、遍満している。いま失つて得た眼睛はどの眼睛であらうかということではあるまい。打失眼睛という眼睛があるということではあるまい。さらにそういう無数の眼睛のなかに、雪裏梅華只一枝という眼睛があつて、それが春に先立つて春の心をもらすということではあるまい、という。そうであれば、ここも真理の遍満ということにならうか。

次に移る。

先師古佛、上堂云、霖霖大雨、豁達大晴。蝦蟇啼、蚯蚓鳴。古佛不_レ曾過去_一、發_二揮金剛眼睛_一。咄。葛藤葛藤。いはくの金剛眼睛は、霖霖大雨なり、豁達大晴なり。蝦蟇啼なり、蚯蚓鳴なり。不曾過去なるゆゑに、古佛なり。古佛たとひ過去すとも、不古佛の過去に一齋なるべからず。

如淨禪師の偈は、「臨安府淨慈禪寺語録」に見える。全文である。その意味をとつてみる。長く降り続く大雨も、からりと晴れ上がった晴天も、またその折に蝦蟇が啼き蚯蚓が鳴くのも、古仏はかつて過ぎ去らずにその金剛の眼睛を發揮しているからである。これは言い過ぎというもの、閑葛藤である、と。これに対する道元の評釈は、ここにいう金剛眼睛とは霖霖たる大雨であり、豁達たる大晴であり、蝦蟇啼であり、蚯蚓鳴である。それらはすべて過ぎ去らなから古仏なのであって、古仏が仮りに過ぎ去ったとしても、それは古仏でないものが過ぎ去ったのと同じでない、ということになろうか。そうだとすれば、これも古仏の金剛眼睛の全機現成、遍満ということになろう。

次に移る。

先師古佛、上堂云、日南長至、眼睛裏放光、鼻孔裏出氣。

而今綿綿なる、一陽三陽、日月長至、連底脱落なり。これ眼睛裏放光なり、日裏看山なり。このうちの消息威儀、かくのごとし。^{m)}

如淨の言葉は、『台州瑞岩禪寺語録』に見え、その全文は、「冬至上堂、晷道推移。打圓相云、看日南長至眼睛裡放光。鼻孔裡出氣還知向上事麼、飽飯快活厨一堆。超過瞿曇親授記」である。その意味は、冬至上堂、陽ざしの運行が移って冬至を迎えた。円相を描えて云う。看よ、日は南から一日と長くなる。しかし眼睛は光を放ち、鼻孔は息をしている。ところで仏教の真実義（向上事）を知っているか。それは快食快便し、釈尊から親しく授かった印可証明をも飛び超えることだ、となろうか。これに対する道元の評釈は、冬至から正月へと続いて日は長くなっていくが、その連続が極まって、連続のままにそれを超越するのである。これが眼睛の放光であり、日の光のなかで山を看るとい

うことで、不思議なことではない。如浄古仏のお言葉はこのようなものである、と。ここは非連続の連続ということか。

さて最後の『如浄禪師語録』からの引用と道元の評釈は次の通りである。

先師古佛、ちなみに臨安府淨慈寺にして上堂するにいはく、今朝二月初一、拂子眼睛凸出。明似鏡、黒如漆。驀然蹠跳、吞卻乾坤。一色衲僧門下、猶是撞牆撞壁。畢竟如何。盡情拈卻笑呵呵、一任春風沒奈何。

いまいふ撞牆撞壁は、渾牆撞なり、渾壁撞なり。この眼睛あり。今朝および二月、ならびに初一、ともに條條の眼睛なり、いはゆる拂子眼睛なり。驀然として蹠跳するゆゑに今朝なり、吞卻乾坤いく千萬箇するゆゑに二月なり、盡情拈卻のとき初一なり。眼睛の見成活計かくのごとし。

9

先ず如浄の偈の意味をとってみる。今朝二月一日閉爐の日である。払子の眼睛（仏祖の面目）が突出し、その眼睛の明かなることは鏡の様であり、黒いことは漆のようである（差別以前である）。その払子の眼睛がまっしぐらに跳び上がつて天地を呑み尽して眼睛一色となった。もはや払子もないのである。それなのにわが門下は不相變牆に突き当り、壁に突き当って差別の世界に墮在している。これは要するにどうしたことか。わたしは人情を尽して払子を拈じて呵々と笑い、あとは春風に任せよう。どうにもならないから。これに対する道元の評釈の意味をとってみると、ここにいう撞牆撞壁というのは、人が牆や壁に突き当るということではなく、牆が牆に、壁が壁に突き当るということで、つまり牆のみ、壁のみである。実はこのような眼睛もあるのである。一方、今朝、二月、初一、それぞれ眼睛であって、それはいってみれば払子眼睛である。払子と眼睛と二つある。ところがまっしぐらに跳び上がつて、更に徹

底すると、そこに今朝が現成し、天地を何千万回も呑み尽して一物も残さないから二月が現成し、情を尽して払子を拈ずるから、つまり閉炉上堂に徹するから初一なのであって、眼睛の現実の活動とはこのようなものである、と。それは眼睛（真理）の全機現成、今朝・二月・初一といった個別の現成、その個別を現成せしめる眼睛の働きを述べるものであろう。

ところで、如浄が「衲僧門下」というところは、道元にとっては自分自身のことであるから、これに対して答えなくてはならないであらう。如浄は、眼睛一色になってもはや払子もなにもない、それなのにわが門下は牆にぶつかり壁にぶつかりして対立差別観にとらわれている、とするのに対して道元は、その「撞牆撞壁」とは牆が牆に壁が壁に突き当るのであって、牆の全機現成、壁の全機現成の意味に解するのである。これは表面的には道元の誤解である。少なくとも如浄に即していない。しかしそこに道元の道元たる所以、道元の真骨頂がある。眼睛一色になってもはや払子も何もない、眼睛の全機現成であるとするのが如浄の真意であるとすれば、その意に沿って牆の全機現成、壁の全機現成を説いたといつてよいからである。しかもその牆とか壁とかいう個別、しかもそれら無価値なもの全機現成といえは、どうしても価値あるもの、真理（眼睛）とその現われととられ易い。そこに価値と無価値の二つのものが分別され、対立する。「拂子眼睛」で、つまり払子と眼睛の二つがある。そこで個別の真の意味での全機現成を説かなくてはならない。つまり個別である今朝、二月、初一の全機現成を説かなくてはならない。（勿論そうなると、今朝……という個別も個別といえなくなるであらう。）その点を強調するために、あるいはそのような境地が開けるためには、「驀然として跣跳する」、「千万箇の乾坤を吞卻する」、「情を尽して払子を拈却する」ということがなければならぬ、というのであろう。それは徹底である。この巻の最初に立ちかえつていえば、煩惱即眼睛の徹底である。とにかくここにも道元の如浄の真意を追求し、それに迫っている姿が見られるように思われるのである。

注

- (1) 「正法眼藏眼睛第五十八 爾時寬元元年癸卯十二月十七日、在越州禪師峯下示衆。……」、大久保道舟編纂『道元禪師全集』上卷、四九七頁、「正法眼藏家常第五十九 爾時寬元元年癸卯十二月十七日、在越州禪師峯下示衆。……」、同上『道元禪師全集』上卷、五〇一頁。
- (2) 右同『道元禪師全集』上卷、四九四頁。
- (3) 「……八萬四千の眼睛なりとは、八萬四千の煩惱を、八萬四千の眼睛となして用ゐるなり。」(聞解)、「……八萬四千の煩惱眼睛、即是祖門宗乘の正法眼なり、……」(辨註、那一寶)、『正法眼藏註解全書』第七卷、四七七頁～四七八頁。
- (4) 前掲『道元禪師全集』上卷、四九四頁。なお如浄の偈は「明州瑞岩語録」、大正蔵、第四十八卷、一二六頁上。
- (5) 同右、四九四頁。(6) 同上、四九五頁。
- (7) (8) 前掲『正法眼藏註解全書』第七卷、四九一頁。
- (9) 前掲『道元禪師全集』上卷、四九六頁。
- (10) 大正蔵、第四十八卷、一二二頁下。
- (11) 前掲『道元禪師全集』上卷、四九六頁。
- (12) 前掲、大正蔵、第四十八卷、一二二頁中。
- (13) 前掲『道元禪師全集』上卷、四九六頁。
- (14) 前掲、大正蔵、一二三頁上。(15) 同上、四九六～四九七頁。
- (16) 前掲、大正蔵、第四十八卷、一二四頁上。
- (17) 前掲『道元禪師全集』上卷、四九七頁。
- (18) 前掲、大正蔵、第四十八卷、一二三頁中。
- (19) 前掲『道元禪師全集』上卷、四九七頁。なお如浄の偈は、大正蔵第四十八卷、一二四頁上。